

北方文芸別冊

通巻361号

11

2004年12月 北方文芸刊行会刊



蜜柑の実の熟すまで — 藁屋正久
闇の原 — 刺賀秀子
平岸村(完) — 澤田誠一

蜜柑の實の熟すまで／藁谷正久²

闇の原／刺賀秀子⁸

詩・死んだふりをしている木／斉藤征義

三岸好太郎と外山卯三郎／工藤欣弥

北方文芸 別冊 11 通巻361号

2004・12

歲月遠望―山田昭夫氏のこと―／平林一良
便利な声／上田敦子

娘の結婚／高橋知子
鶯／工藤欣弥

かわいた砂／河井渉

平岸村(完)／澤田誠一

平岸村 (完)

澤田 誠一

病虫害

もうすっかり白髪になったお婆あが細い身体をまげて囲炉裏のなかの燠火に炭をついでいる。その膝の上に勢がはいのぼってゆく。

「どうしたかの」

「うむ」

「どうしたのかの」

「お婆あ、あの山からかます爺っこ来る話でない話して」

「どんな話をしたらよいのかの」

